



# 隣家と向かいの 悶尻妻たち

庵乃音人  
挿絵／岬ゆきひろ

立ち読み版

第一章	全裸の幼なじみを出歯亀……………	4
第二章	向かいの熟女妻の淫らな口奉仕……………	37
第三章	夢にまで見た筆下ろし天国……………	65
第四章	未亡人のせつない誘惑……………	116
第五章	幼なじみが下品な獣になるとき……………	175
第六章	美女たちの猥褻ご奉仕合戦……………	198
エピローグ	そして、ハーレムの日々は続く……………	280

## 登場人物

Characters

### 萩原 貴樹

(はぎわら たかき)

大学進学を目指して勉強する高校二年生。奥手で生真面目な性格。幼い頃に母親を亡くし、父親と二人暮らしだったが、半年前に父親が海外転勤となり、一人暮らし生活をすることに。

### 遠野 明里

(とおの あかり)

貴樹の左隣に住む清楚で生真面目な二十四歳の若妻。交通事故で病院暮らしする実母の看病のため、転動した夫にはついて行かず家に残る。さらに一人暮らしする幼なじみの貴樹の面倒もあれこれと見ている。

### 杉村 百合子

(すぎむら ゆりこ)

貴樹の向かいの家に住む三十二歳のセレブ熟妻。多くの男性が高嶺の花的に見とれる美貌と豊かなボディの持ち主。「これは」と思った異性にはよく尽くす。明里と同様に貴樹の世話をしている。

### 柳瀬 菜緒

(やなせ なお)

貴樹の右隣に越してきた二十六歳の未亡人。小学生の息子がいる。母性愛に富んだ癒やし系ほんわか美人。恥じらいながらも初対面から積極的に貴樹に話しかける。





### 第三章 夢にまで見た筆下ろし天国

翌日は休日だった。夕飯は、明里の家で食べさせてもらうことになっていた。約束の時間になり、家を出る。今日、明里は早朝に家を出て、日帰りで東京まで行っていた。単身赴任をしている夫の身の回りの世話を焼くためだ。

昨夜一緒に食事をしたときは、「明日は突然行って驚かせてやろうと思ってるの。サプライズ訪問よ」と茶目つ気たつぷりに笑っていた。

そんな明里がすでに戻ってきているのは、隣家に点った灯りで分かっていた。いつものなら帰りがけに顔を覗かせ、「貴樹。今夜忘れてないわよね」と声をかけてくれることが多かったが、今日は家を素通りして帰っていった。約束の時間より帰宅が遅れたため、早く食事のしたくをしなくてはと急いでいるのかも知れない。

「た、貴樹さん、こんばんは」

道路に出て隣家に向かおうとした貴樹の背中に、たおやかな声が飛んだ。振り返る。片手にレジ袋を提げた菜緒が、微笑みながら立っていた。

ダークレッドのタートルネックシャツに、茶色の膝丈スカートという出で立ち。昨

夜とは一転した、女性らしいエレガントな装いについ目を釘付けにさせられる。

「うっ……」

自分から声をかけてきたくせに、目が合うと菜緒は恥ずかしそうに睫毛を伏せた。

「こ、こんばんは。あっ……」

菜緒のかたわらに立つ、小学生らしき男の子を見た。

たしか七歳になる息子がいると言っていた。多分この子がそうなのだろう。

「擁平ようへい、ご挨拶は？ 隣のおうちの、貴樹お兄ちゃん」

どうやら擁平というらしい。菜緒は身を屈め、優しい口調で息子にうながす。

「こんばんは」

男の子はあどけない声で言い、ぺこりと頭を下げた。手には母親と同じレジ袋を提げている。駅前のスーパーで、一緒に買い物でもしてきたらしい。

「こんばんは、擁平くん」

貴樹がにこやかに答えると、緊張していた擁平の表情が笑みに変わった。「先に行つてなさい」と菜緒に鍵を渡され、門扉を開けて玄関ポーチに駆け込んでいく。

「可愛いお子さんですね」

まんざらお世辞でもなく言う、菜緒は嬉しそうに微笑んだ。

どういうわけか、どこかきこえないものの、やはりこの人の笑顔は可愛いと改めて思う。大きな目が垂れ目になる瞬間のギャップに大いに萌えさせられた。

「あの、貴樹さんは、どこかにお出かけ？」

ゆつくりと貴樹に近づき、菜緒が聞いた。微妙に、視線が噛みあわない。

タートルネックシャツの下で豊満な乳房がユサユサと揺れた。

（やっぱりけっこう大きい）

思わず目を吸い寄せられそうになり、意志の力で必死に抗った。明里より少しだけ小さめかも知れないが、いずれにしてもいい勝負の見事な巨乳だ。

艶めかしい曲線を描くふくらはぎも美しかったが、ひらひらと翻るスカートの裾から見え隠れするふとももの量感も、思春期の少年を落ち着かなくさせた。

「あの、隣の明里姉ちゃん……遠野さんの家に、夕飯をご馳走になりに」

「遠野さんのお宅に？」

菜緒が明里ともすでに挨拶をすませていることを、貴樹は知っていた。昨夜貴樹の家を辞した後、隣家の玄関口で初顔合わせの会話を交わす二人の声が聞こえた。

貴樹は手短かに、現在の自分の境遇や明里との関係を菜緒に話した。明里ばかりではなく、向かいの百合子にもいろいろと面倒を見てもらっていることも忘れずに話す。

「そうなんだ。貴樹さん、ご近所の人気者ですね。可愛いから無理もないかしら」  
ややこわばった笑顔で、菜緒が言った。

「いや、そういうわけじゃ。迷惑かけてはつきりです」

何と答えてよいか困り、貴樹は照れて言葉を返す。

「よ、よかったら、今度うちにもご飯食べに来てください。息子ともお友達になってもらえる嬉しいな。新しい環境だから、いろいろと不安みたいで」

「あ、はい。ありがとうございます。僕なんかでよければ」

「ほんとに？ 嬉しい。約束ですよ」

小躍りして喜ばれ、ほっこりと胸のあたりが温かくなった。少しだけ、貴樹に対する緊張感が和らいだ気がした。

（ほんとに可愛い人だな。あの若さで未亡人だなんて）

菜緒と別れ、明里の家に向かいながら貴樹は思った。

突然の事故で連れあいを亡くしたことを、昨夜本人の口から聞かされていた。

初対面でいきなりの重たい告白。何と答えていいものかとまどったが、菜緒はあつからかんとしていた。相手が年下の少年だから、気安く感じたのかも知れない。

（さてと。菜緒さんの可愛さに鼻の下を伸ばしてる場合じゃないぞ）



貴樹は気合いを入れ直し、灯りのついた、愛しい年上の人の家を見る。

「明里姉ちゃん」

名前を呼ぶだけで緊張感を覚えた。ジーンズの尻ポケットに手をやる。封筒があった。「よし」と小さく呟く。

いろいろ考えた末、やはりできることなら自分の童貞は明里に捧げたいと思った。百合子に大人にしてもらえるなら、それもたまらなく魅力的な筆下ろしになるだろう。あんな妖艶な痴態を見てしまえばなおさらだ。

だが決め手になったのは、やはり明里への積年の想いだった。

憧れの「お姉ちゃん」はもう他の人と結婚し、手の届かない存在になってしまった。それはいい。明里が幸せなら、そんな明里の姿を間近で見られる自分も幸せだ。

しかしそうは思いつつ、自分の気持ちも伝えておきたかった。

——本当はお姉ちゃんのが好き。昔から、ずっとずっと好きだった。でも迷惑をかけるのは本意ではないんだ。お姉ちゃんへの恋心はきつぱりあきらめる。

ただ、できることなら一生の思い出に——僕の初めての人になってくれませんか？今夜はそんなメッセージを伝えるつもりでした。

だが本人を前に、そんな気恥ずかしいことを直接言える勇氣はとてもない。そのた

め貴樹は一日かけて、心情をしたためたラブレターを書き上げたのだった。

『うん、ほんとと言うと、わたしもその方がいいんじゃないかなって思ってた。がんばって明里さんにぶつかってきなさい』

百合子にも、すでに気持ちは伝えてあった。貴樹の話聞いた百合子は少年の背中を後押しするように言い、優しくハグまでしてくれた。

「さあ、行くか」

大きく深呼吸をする。とくとくと心臓を打ち鳴らし、遠野家の門扉を開閉してアプローチを抜け、玄関ポーチに立った。ドアチャイムを押す。

しばらくすると足音が近づき、内側からロックがはずされた。

「いらっしやい」

ドアを開け、明里の明るい声が響いた。

「こんばんは。今日もお言葉に甘え、て……来ちゃっ……た……」

にこやかに微笑んで挨拶をしようとした。だが貴樹の言葉は尻すぼみになる。

「どうしたの、お姉ちゃん？」

自分の表情がこわばるのが分かった。

「え、何が。さあ、上がって」

エプロン姿の明里は笑いながら、先に立って三和土から上がる。

「何がって……」

貴樹はとまどいの声を漏らして明里に続いた。

明里の目は涙で潤み、頬には幾筋もの涙の痕があった。廊下を歩いてダイニングに入ろうとした人妻は手で涙を拭い、鼻を吸る。

戻ってきてから着替えてもいないのだろう。エプロンの下は、エレガントな黒のロングTシャツに、上品さを感じさせるチャコールの膝丈スカートという装いだ。

「ごめんね。時間がなくなっていたものは作れなかったけど。さあ、食べよう」

ダイニングのテーブルには、いつものようにおいしそうな料理が湯気を上げて並べられていた。十分すぎるほど「たいしたもの」だ。だが今はそれどころではない。

「お姉ちゃん、何かあったの？」

片手鍋の蓋を開け、お椀に味噌汁をよそおうとする明里に後ろから声をかける。

「え？ 何も無いわよ」

鼻を吸って明里が答える。笑おうとした声が悲しみを滲ませて震えた。

「何も無いわけじゃない。じゃあ、どうして泣いてるの？」

「泣いてなんかいないってば」

「正喜さんと何かあった？」

畳みかけて聞いた。味噌汁をおたまですくいあげた明里の手が止まる。

「そうなの？ 何かあったの。ねえ、お姉ちゃん。あっ」

明里は、おたまを片手鍋に落としてしまう。もう片方の手からはお椀が落ち、ダイニングの床に跳ねてけたたましい音を立てた。ガスレンジの縁に両手を置いてうつむく。やがて身体が震え、ひっく、ひっくと、しゃくり上げ始めた。

「お姉ちゃん……」

「貴樹」

こちらを振り向く。艶やかな黒髪が乱れて波打った。淑やかな美貌がくしゃりと歪み、瞳から大粒の涙が溢れ出す。貴樹は言葉を失った。明里は泣きながらもう一度少年の名を呼び、腕の中に飛びこんで来る。胸に顔を埋め、子供みたいに号泣した。

「明里姉ちゃん」

とまどった。明里がこれほど取り乱し、身も蓋もなく涙にむせぶ姿を目にするのは初めてだ。だが、少年を惑乱させる理由はそれだけではない。

（え。お、おっぱいが、当たってる）

幼いころは、甘えて抱きついたこともあった。

だが異性として意識し、密かな恋情にせつなく身を焦がすようになってからは、こんな風に身体を密着させたことは一度もない。つい身体が過熱した。

「あの人ね。女の人がいたの」

嗚咽して、明里が言った。貴樹は驚き、「えっ」と聞き返す。

「ちよっと前から、おかしいなって気はしてたの。あたしが世話を焼きに行くのも迷惑そうな感じだったし」

しゃくり上げるせいできれときれだったが、そう説明された。

そういえば、と思い出す。家庭教師をしてくれる明里が心ここにあらずという感じで、憂鬱そうに物思いに沈んでいた、あの姿――。

「だから、今日はあえて連絡しないで行って見たの。そうしたら……」

あとは言葉にならなかった。貴樹に抱きついて泣き崩れる。貴樹は今にもくずおれてしまいうような女体を掻き抱いた。夫の単身赴任先で、決定的な「何か」を見てしまったのだろう。その瞬間の明里のショックと悲しみを思うと、胸を締めつけられた。

「何てこと……正喜さん、あんまりじゃない」

たいせつな幼なじみにこんな思いをさせる正喜に貴樹は怒りを覚えた。

（僕だったら、絶対に明里姉ちゃんを裏切るようなことはしないのに。お姉ちゃん、

幸せじゃなかったんだ。知らなかった……」

明里への同情が、「だったら僕がお姉ちゃんを守る」という強い決意に変質する。だが――。

（ううっ、それにしてもお姉ちゃん。おっぱい……）

場違いもはなはだしい狼狽だというのは百も承知だ。だがいつそう身体を密着させたせいで、乳房の感触は鮮烈なものになっていた。温かく柔らかな乳肉が、艶めかしくひしゃげている。バクバクと脈打つ心臓の音を聞かれてしまいはしないかと焦った。風呂場で盗み見た裸体を思い出し、よけい淫らな痴情が募る。

（こんなときに、何を思い出してるんだ、僕は。ああ、でも……）

「貴樹。あたし、もう何も信じられない」

明里は少年の動揺も知らず、涙声で言っつて顔を擦りつけた。

（お姉ちゃん。か、可愛い）

年上の女性なのに、女性本能を刺激される。悲しみに震える女体を抱擁する手に、我知らず淫靡な力が漲った。

（守ってあげたい。こんなに泣いてる。大丈夫、僕がいるって言っつてあげたい）

嘘ではなかった。だがどうして、相手を恋しいと思う気持ちは、獣のような肉悦を

伴ってしまふのか。密着した明里を愛しいと思えば思うほど、この人の身体を自分のものにしてほしいという欲望が募ってしまう。

（だめだ。どうしよう。お姉ちゃんに気づかれちゃう）

股間に血が集まり、ペニスが硬くなり始めた。

明里への愛おしさと憐れみ、温かな女体と蠱惑的に押しつけられる乳房の淫力——それらが一つに混じりあい、脳髓を酩酊させる。

「……えっ」

案の定だった。貴樹の身体に異変を感じたらしい明里は、虚を突かれて驚きの声を上げる。身を離し、少年の股間を見下ろそうとした。

「あ、明里姉ちゃん」

（もうだめだ）

貴樹は明里を抱擁し直し、力任せにダイニングの床に押し倒した。

「きゃっ。貴樹。何するの」

夢にも思わなかった展開だろう。明里は驚愕と怒気を悲鳴に滲ませ、女体を組み敷こうとする幼なじみの少年をなじった。

「ごめん、お姉ちゃん。ああ、どうしよう」

暴れる明里の抵抗を封じようとした。

「いや、やめて、貴樹」

明里は貴樹から逃れようと、必死に暴れる。そのたびに涙の雫が飛んだ。

「お姉ちゃん、好き。ずっと好きだったんだ」

「な、何言ってるの。放して。放しなさい、貴樹」

パニックに陥った明里の抵抗は激しかった。

荒い吐息が交錯する。全力で四肢をばたつかせる幼なじみを懸命に押さえつけた。その手が偶然、たふたと躍る豊満な乳房に触れる。

(ううっ。お姉ちゃんの、おっぱい。くうう)

辛抱が利かなかった。貴樹はつい、揺れる片房を驚掴みにする。

「あん、いや。触らないで」

「お姉ちゃん、柔らかい」

エプロンや服、ブラジャー越しだったが、みっしりと乳腺を張りつめた若々しい乳房はとろけるほど柔らかかった。生まれて初めて揉みしだく女の人の乳房。しかも揉んでいるのは、この世で一番憧れ続けた幼なじみのおっぱいだ。

「やめて。正気に戻って。あん、いやあ！」



揉めば揉むほど息苦しさが増し、愛しいこの人と一つに繋がりたいという激情が強まる。片房だけでは飽き足らずにもう一つの乳房も掴み、一緒にせり上げて揉みこねた。エプロンの生地がカサカサと乾いた音を立てる。

「ひどい。ひどいわ」

明里に涙声でなじられた。貴樹はうろたえる。

「お姉ちゃん。違うんだ、僕ほんとはこんな風にしたかったわけじゃ——」

「貴樹の馬鹿！」

突然、焼けるような痛みが頬に弾けた。平手打ちを喰わされたのだと気づくまでに少し時間が要った。張られた頬を押さえ、我に返る。

「大嫌い!!」

「あつ、お、お姉ちゃん」

明里は貴樹を突き飛ばし、拘束から逃れた。バランスを崩した少年は不様にくずおれ、仰向けに転倒する。

乱暴に倒されたせいで明里のスカートはたくしあがり、もう少しでパンティが見えそうになった。パンストに包まれた、むちむちしたふとももが貴樹の目を射る。

明里はスカートを慌てて直し、憤然と立ち上がった。

「貴樹までこんなことを。男なんてみんな大嫌い!!」

涙の雫を飛び散らせて叫ぶ。髪を振り乱し、ダイニングを飛び出した。

「お姉ちゃん!」

急いで起き上がり、呼び止めようとする。だが明里の足音はけたたましく階段を上がり、二階の廊下を駆け抜けて夫婦の部屋に消えた。

荒々しくドアが閉じられる音がする。

「……やっちゃった」

貴樹は、へなへなとくずおれた。自分の愚かさに、暗澹たる気分になる。

明里の慟哭する声が、二階から聞こえた。

なかなか眠れなかった。日付はとっくに変わっていたが、まんじりともできない。ベッドの上で何度も寝返りを打ち、溜息をついた。

「まさかこんな夜を迎えるなんて」

自業自得とはいえ、あまりにせつなすぎた。携帯メールで詫びを入れたが、返事はない。当然だ。愛する夫に裏切られただけでも心の痛手は相当だというのに、信じきっていた幼なじみにまで蛮行を働かれそうになったのだ。

もう今までみたいな笑顔は二度と向けてもらえないかも知れない——そう思うと、胸が痛んだ。こんな結果になるなら、たとえ玉砕しても思いをきちんと伝え、正式に断られた方がどれだけましだったか。

「あれ？　そういえば」

今の今まで忘れていた。明里に渡すつもりだったラブレターはどうなったのか？　ジャージの上下に着替えていた貴樹は部屋の灯りをつける。ベッドを離れ、クローゼットに歩み寄った。

扉を開ける。ハンガーに吊るしてあったジーンズの尻ポケットを改めた。

「あれ。ない……」

クローゼットのなかを探すが、見つからなかった。

部屋を見回しても、封筒などどこにも落ちていない。

「一階かな？」

いや——下手をすると、道路に落として来たかも知れない。

居ても立ってもいられなくなった。近所の誰かに通りで拾われ、なかを見られでもしたら、恥ずかしくすぎてもうこんなところに住んでいられない。

「やばい。やばいやばい」

慌てて部屋を飛び出そうとした。深夜である。何か一枚羽織った方がいい気もしたが、その時間すら惜しい。ドアに駆け寄り、ノブを掴んだ。

そのときである。枕元に置いてあった携帯電話が鳴った。聞こえたのは、メールの着信を知らせる音だ。こんな時間にいったい誰だろう？

とりあえず、手紙が通りに落ちていないかどうかだけでも確かめた方がいいのでは——そう判断して部屋を出ようとする。だがやはりメールも気になった。

きびすを返し、ベッドに戻る。スマートフォンを取り上げて画面を見た。

「あっ」

思わず声を上げた。明里からのメールだったのだ。

液晶パネルを操作する手ももどかしく、急いでメールを開く。

「……えっ」

文面を一読し、心臓が跳ねた。もう一度文字を追う。

『貴樹。ベランダからおいで』

「お姉ちゃん」

窓辺に近寄り、隣家を見た。

灯りは点いていない。だがメールをくれたのだ。起きているのは間違いない。

「どうしたんだろう？」

明里のことで、たちまち心がいっぱいになった。あんなに心配でならなかったラブレターの行方なのに、あつという間に脳裏から消え去る。

窓ガラスを開け、ベランダに出た。ひんやりした夜気に鳥肌が立つ。しかし貴樹はジャージの上下のまま鉄柵を乗り越え、遠野家のベランダにジャンプした。

無事着地し、柵を越える。取っ手を横にずらすと窓ガラスが開いた。

灯りの消えた部屋に身をすべり込ませ、窓を閉める。明里たち夫婦がリビング的に使っている洋室。だがそこに、明里の姿はない。

(どこにいるのかな?)

一階か? ドアを開けて廊下に出た。階段を下りる。

階下も真っ暗だった。とりあえずリビングを覗いてみようと思ちらに向かう。

「貴樹」

脚が止まった。後ろを振り向く。客間から、声が聞こえた。

(お姉ちゃん?)

どうして客間なんか……。きびすを返し、声のした方に向かう。客間は和室で、入口の襖がぴたりと閉じられていた。拳を握りしめ、ノックする。

「入って」

声がした。貴樹は深呼吸をし、引き手に手をやる。そつと開いた。

「あつ……」

部屋の光景を目にして、小さな声を漏らした。灯りのない薄暗い部屋。閉めた障子越しに差し込む月明かりが、室内を青白く染め上げている。

中央に布団が敷かれていた。

明里は、そこにいた。布団の上に横座りになり、照れ臭そうにうつむいている。

(明里姉ちゃん)

貴樹は息を飲んだ。明里はセクシーなナイトイ姿だった。

(もしかしてベビードール？ しかも……透けてる)

白い生地に花柄らしきデザインが施されたナイトイだった。シースルー素材らしいのは、ブラジャーとパンティが透け見えていることで分かった。

パジャマ姿は見たことがあったが、こんなあだっっぽい夜着に装った幼なじみを目にするのは初めてだ。若妻ならではの淫靡なフェロモンがほんのりと香り立つ蠱惑的な眺めに、貴樹はごくりと生唾を飲んだ。

だが、明里のセクシーな姿に浮き足立っている場合ではない。さつきしでかしてし

まった不始末を、きちんと謝罪しなければ。

「あ、あの、お姉ちゃん」

「おいで」

貴樹の言葉を遮って、明里が顔を上げた。色白の美顔が紅潮しているように見えるのは気のせいか。ベビードール姿の人妻は、両手を伸ばして貴樹を誘う。

「え。いや、あの。お、おね……こほっ」

声がかすれた。そんな貴樹に、明里がはにかんだ微笑みを向ける。

「もういいから。ほら。抱っこしてあげる」

胸がキュンとなった。

（もしかして……許してもらえるの？）

もう終わりだと、最悪の事態まで覚悟していたせいだろう。不覚にも涙を零しそうになり、ぐっと耐える。

「明里姉ちゃん」

襖を閉じ、小走りに近寄った。広げられた白い腕のなかに飛びこむ。

「あっ」

貴樹の勢いを受け、明里は布団に仰向けになった。貴樹はそんな人妻に覆い被さる

格好になる。さつきとよく似た体勢。だが、明里の態度は先刻とは全然違う。

「貴樹」

自ら腕を回し、貴樹を抱擁した。温かで柔らかな女体。「いい子いい子」と頭を撫でてくれる。とろけるような心地になった。いや、完全にとろけた。

うっとりと目を閉じ、万感の思いで熱い吐息を漏らす。

「ごめんね。お姉ちゃん、貴樹を勘違いしてた」

少年の髪を優しく梳き、囁き声で言った。

「えっ？」

貴樹は明里の首筋に顔を埋め、されるに任せながら聞き返す。ソープの香りに、明里の体臭そのものが放つ芳香がブレンドされた甘い匂いに恍惚となった。

明里は髪から手を離し、何かをまさぐり始める。顔を上げ、音のする方を見た。

「あっ」

つい驚きの声が出た。明里の手には、身に覚えのある封筒があった。しかも、すでに開封されている。

「そ、それは……」

途端に気恥ずかしくなった。思いの丈のすべてを注ぎ込んでしたためた愛の告白を、



明里に読まれたのが分かったせいだ。

「あたしがあんな風に抱きついちゃったから、ややこしいことになっちゃったのね」  
明里は苦笑し、手紙を枕元に置いて貴樹の頬をそっと包み込む。

「知らなかった。貴樹がお姉ちゃんのこと、そんな風に思っていてくれたなんて」  
潤んだ瞳で見上げられ、身体がじわじわと過熱した。

「明里姉ちゃん……」

「そんな照れ臭そうな顔しないで。あたしだって、ほんとはすごく恥ずかしいのよ。  
でも、集められるだけの勇気をかき集めて、貴樹とこうしてる……」

その言葉に嘘はないはずだ。微笑んだ美貌には、ぎくしゃくとしたこわばりがある。  
「誤解しないでね」

貴樹の前髪を優しく撫で上げ、額を剥き出しにさせて明里が言った。

「あの人に裏切られたから、やけになってるわけじゃないの。やられたからあたしも  
やり返してやろうとか、そんな風に思ってるわけでもない」

「お姉ちゃん……」

「ほんとにあたしなんかでいいの？」

きらめく瞳で見つめられた。これほどの至近距離で、こんな風に見つめあったのは

初めてだ。月明かりに浮かぶ明里の美貌は震えが来るほど美しかった。

「思い出、くれる？」

感激と緊張で声がうわずった。そんな貴樹を見て、愛おしげに明里が笑む。

「お姉ちゃんなんかでいいならね。でも約束して」

微笑みながらも、真摯なものを滲ませた顔つきになる。

「今夜一晩だけ、お姉ちゃん、貴樹のものになつてあげる。その代わり、それでお姉ちゃんのこと、忘れてくれる？」

「えっ」

「だつてお姉ちゃん、人の奥さんなんだから。たとえどんな旦那さんだとしてもね。お姉ちゃん、正喜さんと何とかやり直したいって思つてるの」

せつない気持ちになつた。正直に告白するなら、正喜への失意から、自分に想いを移してくれたのではないかという虫のいい勘違いをしていた。

だがやはり明里は、貴樹が知っている通りの女性だった。裏切られていたことがはつきりしたというのに、それでも正喜との仲を修復し、変わらぬ愛を捧げ続けたいと願っているらしいことを知り、（お姉ちゃんらしいな）と改めて愛おしさが募る。

貴樹に一晩だけ思い出をあげようと決意してくれたのも、逡巡に逡巡を重ねた末の

ことだったに違いない。

「分かったよ。約束する」と貴樹は言った。

「今夜だけでいい。二度と望まない。だから僕を……大人にして」

「貴樹……」

改めて抱擁された。柔らかな乳房が、胸板に圧迫されてふにゅつとつぶれる。ペニスはずでに完全に勃起していた。明里も気づいているはずだ。

「お姉ちゃん、あまりうまくないかも知れないわよ？」

「そんなの関係ない。お姉ちゃんにしてもらえるなら、それだけでもう……あつ」  
貴樹を抱きしめたまま、明里はいきなり女体を反転させた。

仰向けになった貴樹に、布団に手を突いた明里が覆い被さる格好に変わる。

「今夜だけ。そして一回だけよ。お姉ちゃん、うんと恥ずかしいけど、一回だけ、エッチなことしてあげる。貴樹を……大人の男にしてあげる」

明里はすつと身体を下降させた。ジャージのズボンの縁を掴み、トランクスごとずり下ろす。下着に引っかかって下を向いた勃起が、露わになると同時に勢いよくしなり、下腹部の肉をペシッと打った。

「あつ……」

肉棒を見た明里が目を剥く。

「ど、どうしたの？」

「あ、ううん。何でも。ああ……」

熱っぽい吐息を零し、雄々しく反り返った男根をそつと手に取った。潤んだ瞳に驚愕の色がある。どうやら、想像していたペニスと大分違ったらしい。

「貴樹、んっ……」

肉厚の朱唇からローズピンクの舌が伸びた。憧れの幼なじみは恥ずかしそうに顔を火照らせ、ぷっくりと肥大した亀頭に舌を擦りつける。

「うわっ。お姉ちゃん……」

「貴樹。おちんちん、すごく熱い。んっ……」

ちゅぱ。ピチャピチャ。ちゅぱ、んぢゅ。れろん、れろれろ。んぶぢゅ。

明里の舌が卑猥な軟体動物になってくねった。亀頭の肉に食いこんでは、勢いよく舐め上げる。そのたびに、甘酸っぱい恍惚感が股ぐらから全身に爆ぜた。

「き、気持ちいい。夢みたい……お姉ちゃんが、僕のちんちん、舐めてくれてる」

感激した貴樹は呻き、淫らな快感に身を任せた。

「やだ、恥ずかしいわ。そんなこと言わないで。んっ……」

明里はいたたまれなさそうにしつつも、さらに責めをエスカレートさせた。

亀頭を擦過していた舌が、今度は円を描いてカリ首のもつとも出っ張った部分を舐め回す。そうかと思えば、裏スジの部分の繰り返し舐め、ついには亀頭から棹へ、棹から亀頭へと、ペニス全体に満遍なく舌を這わせた。

(舐めてる。綺麗な顔をあんなに歪めて……)

舌を突き出したため、可憐な美貌が不様に崩れ、左右の頬が窪んでいた。

技巧的なことと言えば明らかに百合子の方が上だろう。だがさつき本人にも伝えた通り、「明里にしてみらっている」と思うだけでペニスの感度は何倍にも高まる。

(いつもあんなエッチな顔をして、正喜さんのちんちんを舐めてたのかな?)

ふと考えたら、猛烈な嫉妬心に襲われた。寝取っているのはこちらなのに、言うに言われぬ悔しさがこみ上げる。おそらく正喜が不貞を働いていると知ったためだろう。(焼きもちなんて焼いてどうする。せつかくお姉ちゃんがくれた、たいせつな時間なんだ。よけいなことを考えるのはよそう)

明里のフェラで、貴樹は早くも射精衝動を募らせた。たしかにフェラチオも大感激だが、こんなところで果てるわけにはいかない。

今夜の射精はただ一度だけ——夢にまで見た明里の膣のなかでと決めていた。

「お姉ちゃん。そんなにされたら射精しちゃう。今度は、僕に舐めさせて」

貴樹は必死に括約筋を窄めて射精の誘惑に抗い、攻守を変えようと起き上がる。

「えっ。舐める？ 貴樹が……」

思わぬ懇願だったのか。薄闇のなかでも分かるほど、明里はさらに顔を赤くした。

「お願い。裸になって。お姉ちゃんのきれいな裸が見たい」

「ううっ、貴樹……」

「お願いっ」

両手を合わせて頼み込んだ。最初で最後の夜だと思えば、恥ずかしくてなどいられない。羞恥に身を焦がす美しい幼なじみのあんな姿やこんな姿を脳裏に焼きつけ、一生の宝にしたかった。

「し、しかたのない子」

あきらめたのか、明里は苦笑した。立ち上がり、布団から畳に移動する。セクシーなベビードールの裾をヒラヒラさせて動く明里を熱いまなざしで追った。

「期待通りじゃなくても、がっかりしないでね」

冗談めかして言いつつも、その声はわずかに震えている。

「そんな。そんなことあるわけ……あっ」

貴樹は息を飲んだ。覚悟を決めてくれたらしい明里はベビードールのストラップをいきなり肩からすべらせた。艶やかなナイティが女体を落下し、足元に丸まる。

(何てむちむちした、いやらしい身体)

とうとう純白のブラジャーとパンティだけになった明里を見上げ、勃起したままのペニスを甘酸っぱく疼かせた。

闇にも目が慣れ、明里の女体のはつきりと目にできる。

清らかで、きめ細やかな美しい肌。ふだんは未踏の大地に降り積もる雪のように白いのに、満開の桜を彷彿とさせる色に染まっている様も、少年の春情を煽った。

清潔さを感じさせるブラジャーはかなりサイズが大きい。それでもカップに包まれた双子の乳房は窮屈そうに肉実を寄せあい、ちよつと動くたびにふるふると揺れた。

しかしやはり目を奪われてしまうのは、ダイナミックに張り出した臀部の迫力である。決してサイズ違いではないはずなのに、パンティの布はいっぱいに張りつめ、ピッチリと股間と尻肉に食いこんでいた。

明里は貴樹の高揚した視線から顔を背け、両手を背中に回す。淫靡な音を立ててホックがはずれ、ブラジャーのストラップが二の腕に垂れた。

「あまり見ないで……」

明里は美貌をよけい赤くし、胸からブラジャーをゆつくりと剥がした。

「ああ、お姉ちゃん……」

露わになった巨乳の眺めに、嘆声が漏れた。浴室を覗き見したときは背後からだつたため完全には見えなかった乳房が、今は何もかもさらけ出されている。

お腕を伏せたように形のいい豊乳が、プリンみたいに震えている。

先端を彩るのは、儂げな色合いをしたピンク色の乳首だった。貴樹に淫蕩な舌奉仕をしたせいか、乳首は半勃起程度にまで勃起していた。

「ねえ、我慢できない。触っていい？」

ついに乳房まで露出した半裸の明里に、どうにも自制心が働かなくなった。股間の勃起を雄々しく震わせて立ち上がり、勢いよく明里に抱きつく。

「きゃっ。た、貴樹。いやん。ふわっ」

少年の勢いに圧倒されて後ずさった明里の背中が、和室の壁に密着した。

（お姉ちゃんのおっぱい。あ、温かい……柔らかい）

激昂のせいで理性が麻痺し始めた。

貴樹は明里の乳房を鷲掴みにし、せり上げる手つきで揉みしだく。

「お姉ちゃん、ドキドキする。女の人のおっぱいって、こんなに柔らかいんだ……」



生まれて初めて触り、揉みこねる乳肉の想像以上の柔和さに、貴樹はうっとりとい痴れた。いつもすぐ近くにいたのに、途方に暮れるほど遠い存在だった遠野明里——その憧れの巨乳を、今思いのままにまさぐっているのだ。

「あん、いや、貴樹。どうしよう。恥ずかしい。はうっ。ああん」

息苦しきかられて片房の頂にむしゃぶりつくと、明里が色っぽい声を上げて身体を痙攣させた。母乳に飢えた赤子のように窄めた唇で乳首を包む。

「ふわっ、貴樹。だ、だめ。ああ。あっあっ、ふわああ」

下品な吸い音を立てて乳首を吸い、舌でしつこく舐め弾いた。半勃ちだった乳首が淫らな力を漲らせ、硬く痼りだす。

「乳首、勃起してきた……」

「やだ。勃起なんて言わないで。お姉ちゃん、困る。あああ」

片房の頂を生臭い唾液でベチョベチョに穢した貴樹は、もう一房の乳首へと責めの矛先を変えた。一つ目の乳首より、二つ目の方が最初から敏感だった。

ちゅうちゅうと吸っただけでまん丸に張りつめ、硬度を増す。

「ああん、いやん。だめ。んはああ」

（乳首って、こういう感触なんだ。硬いのに、柔らかさもあって。舐めてるだけで、

メチャメチャ興奮する)

貴樹は痺れるほどの肉悦にかられてペニスを疼かせ、乳首から口を離した。双子の乳房をさらに揉む。涎でぬめ光る勃起乳首がこちらへこちらへと向きを変えた。

揉めば揉むほどたわわな豊乳は張りを増し、貴樹の指を押し返すようになる。

「あうっ、貴樹……」

名残惜しさはありつつも、貴樹はすべらかな巨乳から手を離した。豊熟の巨乳をたふたふと揺らし、パンティ一枚の扇情的な姿で、明里は乱れた息を整える。

いよいよ最後の下着を脱ぐときが来てしまい、躊躇しているのが分かった。

「お姉ちゃん、脱いで。僕も脱ぐから」

貴樹は腕をクロスさせて上着の裾を掴み、なかに着ていたTシャツごと首から脱ぐ。靴下も脱ぎ捨てると、明里より一足先に一糸まとわぬ姿になった。

「ううっ……」

含羞に富んだ顔つきで、明里が長い睫毛を伏せる。

(な、何か、恥ずかしいな)

明里が脱ぎやすいようにととった行動だったが、全裸になると羞恥が募った。女の明里はもつとのはずだと、改めて幼なじみへの愛おしさが増す。

「貴樹、ありがとう。だめね。今日はお姉ちゃんが、貴樹をエスコートしてあげなきゃいけないのに」

貴樹の気づかいを察したらしい。明里は弱々しく笑み、深呼吸をした。

「お姉ちゃん」

「ごめんね。もう恥ずかしがらない。お姉ちゃんの裸、見て……」

改めて覚悟を決め直してくれたらしい。明里は指をパンティの縁にかけた。

「あつ。待って」

少年は硬く張りつめた怒張を脈動させ、明里の行為を止める。

「……えっ？」

「あの。できれば、僕にお尻を向けて脱いでくれない？」

「貴樹」

「恥ずかしいけど僕、ずっとお姉ちゃんのお尻に憧れてたんだ」

恥を忍んでおねだりをした。一夜だけの夢物語。後悔だけはしたくない。

「まあ……いい、いいわ。こう？」

ぱつが悪そうにしつつももじもじと女体を反転させ、背中と臀部を向けた。パンティの布が尻の谷間に食いこんでいる。

気づいた明里は下着の縁に指をかけ、卑猥な食いこみを元に戻した。

(ぞくぞくする)

「脱いで」

貴樹は後ろに下がり、膝立ちになった。

「うん。ぬ、脱ぐね……」

後ろを振り返り、羞恥に満ちた声で言うと、明里は改めて下着に指をかける。

「お姉ちゃん。あつ……」

「ああ、恥ずかしい……」

吐息を漏らして身体を二つ折りにし、つるりと尻からパンティを剥いた。

巨大な水蜜桃を彷彿とさせる圧巻の臀肉が、尻の谷間に濃い影を作って露出される。

まさに、先日風呂場で目にした光景の再現だった。

(あああ。あああ)

貴樹は、挑むように突き出された豊艶な桃尻に身体を過熱させた。

たしかに乳房の淫力もすさまじかったが、尻好きの貴樹にとって、明里のいやらしすぎる巨臀は理性を一瞬にして粉碎する猛毒以外の何ものでもない。

「た、たまらないよ」

自分を抑えられなかった。まだ明里がパンティを脱ぎかけだというのに、愛しい幼なじみの尻に飛びつく。

「きゃっ。貴樹。ああん、やだ、だめよ。あああ」

明里は黄色い悲鳴をあげ、目の前の壁に手を突く。貴樹はそんな明里のふとももを抱きかかえ、柔らかな臀肉に顔を埋めて左右に振った。

「ああ。やめて、貴樹。あん、そんな。ふわあ」

「お姉ちゃん。だめ。興奮する……」

はしたないふるまいをしていることは百も承知だ。だが目の前に露わになった明里の尻尻を前にして、じっとしていることなどできはしない。母親に甘えて頬ずりをする幼子のように、まん丸と盛りあがった臀肉に顔を擦りつけ、下卑た快楽を貪る。

「あん、いやっ。待って。ああん、あんあん。ああんあん」

もちろん、その程度で満足できるはずもなかった。

殻を剥いたばかりのゆで卵を彷彿とさせる、つるつるの尻を驚掴みにする。乳房でも揉むような手つきで、ぐにゅりぐにゅりと柔らかい肉を揉んだ。

「ふはあ。やん、やめて。揉まないで。お尻、そんな風に。ひいい」

くぱっと尻肉を割り、臀裂の底に舌を突き立てると、明里の悲鳴はいっそうけたた

ましさを増した。同時に艶も、ぐんと増す。

「お姉ちゃん。すぐくきれい。お尻の穴もピンク色。信じられない。んっ……」

思いがけない秘肛の可憐さに、よけい痴情が募った。ひくひくと収縮するアナルは、声にならない声を上げるもう一つの唇のようだ。

「だめ。貴樹。あああ」

自堕落な恥悦に全身を痺れさせた貴史は尻肉をさらに左右に割り、肛門を横長にひしゃげさせる。たっぷりの唾液をまぶし、舌で蹂躪した。

「ひいい。ああん、ふはああ」

ピチャピチャ。れろん、れろれろ。んぢゅば。ぴちゃぴちゃ。ぢゆるぶ。

(天国だ。お姉ちゃんの肛門を舐めてる。お尻の肉を揉んでる)

夜な夜なこっそり妄想し、自慰のネタにし続けた、憧れの女性の豊臀——まさか自分の人生にこんな夢のようなときが待っていたとはと感激に震える。

風呂場で丹念に淨めたらしい臀裂の底からは、谷間に籠もる鱧えたような淫臭とともに、清潔なソープの香りがした。放射状に走る皺々が舌と擦れあうたびに、明里はひくん、ひくんと女体を震わせた。

舌を刺激する卑猥な凹凸の感触が、少年の熱狂を煽る。

「あん、だめ。もうやめて。そんなことされたら……」

声のなかにエロチックな羞恥を滲ませ、背後を振り返って明里が言う。

「もう恥ずかしがらないって言ってくれたじゃない」

「そうだけど。あつあつ、いや。あああんっ」

獯猛な劣情が尻上がりに高まる。貴樹は膝にまとわりついていた明里のパンティを脱がすと、肉感的な女体をコマのように回した。明里は「きゃっ」と叫び、されるがままになる。豊満な乳房がいやらしく揺れ弾み、乳首を踊らせた。

膝立ちになった貴樹の前に、もっさりとし秘毛を密生させた恥丘の眺めがアップで迫った。明里は慌てて、股間を隠す。

両手に圧迫された乳房が、ぷにゅつと扇情的にくびり出された。

「お願い。今度はお姉ちゃんのアソコが見たい」

息を弾ませ、口のまわりについた唾液を拭いながら貴樹は新たなおねだりをする。

「あふう、た、貴樹……」

幼なじみの少年を見下ろす若妻の瞳に、淫猥な潤みがあつた。

（お姉ちゃん。少し興奮してきてくれた？）

今まで見たこともない、官能的な表情。楚々として愛らしく奥ゆかしいふだんの姿

とのギャップが貴樹の理性をさらに粉碎する。

「お姉ちゃん、がに股になって」

「えっ」

貴樹の求めに、明里は潤んだ目を大きく見開いた。

「いやらしいがに股になって、手でアソコを開いて見せてほしいの」

「た、貴樹！」

「お願いだから」

まさに駄々っ子そのものとなり、身体を揺さぶって懇願する。明里は顔を真っ赤にし、眉を八の字にして当惑した。そんな明里に、なおも貴樹は「お願い」とねだる。

「貴樹の馬鹿。お姉ちゃんにエッチなことばかりさせて」

長いためらいの間の末だった。

なじりつつも、ようやく覚悟を決めてくれたらしい。明里は大きく溜息をつく。

「誰にも内緒よ？ 生まれて初めて、お姉ちゃんこんなことするんだから」

「分かってる。お姉ちゃん、見せて……」

夫にさえ見せたことのないふるまいをしてもらえるのだと思うと息苦しくなった。

そんな貴樹の眼前で、観念したように壁につけた背中を下降させ、明里は両脚を開



く。だが恥じらいに満ちたその開き方は、がに股にはほど遠かった。

「お姉ちゃん、もつと。僕がしてあげる」

こらえきれず、柔らかな内ももに指を食いこませた。そのまま力を入れ、控えめに開いていた両脚を大胆に左右に開く。

「ああん、いや。貴樹の馬鹿。ううっ、何てかつこ……」

「お姉ちゃん……」

両手で股間を覆ったまま、全裸の若妻は下品なポーズになった。

まるで相撲取りが四股を踏むようなはしたない眺め。ますます日ごろの明里のイメージとの落差が激しくなる。貴樹の淫情はメラメラと燃え上がった。

「お姉ちゃん。お願い。指でオマ○コ広げて」

「た、貴樹。そんな言葉使っちゃダメ……」

「ねえ、早く。一生の思い出しにしたいんだ」

すると明里はいいやとかぶりを振り、「だめよ。すぐに忘れて」と訴えた。

「でないと……してあげない」

「あ、明里姉ちゃん」

（可愛い）

年上の女性なのに、父性本能を刺激された。キュンと胸が疼く。

「忘れる。すぐに忘れるから」

すがる口調で貴樹は叫んだ。明里は小さく呻いて唇を噛む。

なおもためらった。無理もない。一人のときですらしたことのない行為だろう。

「貴樹の馬鹿」

もう一度、同じことを言った。声の響きに、どこか優しいものがある。

股間を隠していた白い指がゆっくりと左右に動いた。

（ああ……）

黒々と生え茂る恥毛の繁茂に続き、とうとう媚肉が露わになる。

（見えた。これが、お姉ちゃんのオマ○コ）

縮れた陰毛の下に、ほぐれかけた肉ビラが飛び出す女陰の眺めがあった。

ふかしたての肉まんにも似たふつくらした大陰唇が、咲きかけた淫花に押しつけら

れて左右に広がっている。肉ビラからは透明な汁が滲んでいた。

「見せてあげる。すぐくエッチなお姉ちゃん。ああ、恥ずかしい」

羞恥に満ちた声で言うと、若妻は野卑な姿のまま、二本の人差し指をビラビラの縁

にあてがった。とまどいの息を漏らし、ゆっくりとラビアを広げる。

「んああ、お姉ちゃん。すごい……」

「あうう、た、貴樹……」

完全に晒された媚肉の猥褻さに、貴樹はうわずった声を上げた。

目を剥いて秘唇を凝視する。持ち主自身の指で菱形に広げられた小陰唇は、美しいサーモンピンクだった。上の方にある小さな穴が尿口、下の方の窪みが膣だろう。膣らしい窪みからは透明な汁が溢れ出し、ワレメの下部に溜まっていた。

（これって、愛液だよな。それでこれが……）

ワレメの上に鎮座するクリトリスを見る。憧れの幼なじみの淫核は、まだ淡い桜色をした肉莖のなかにほとんど肉実を潜めたままだ。

「そんなに见ないで。ねえ、もういい？」

下劣ながらに股の格好で媚肉を広げた明里は、いたたまれなさそうに顔を背け、震える声で聞く。恥じらいに満ちた声と美貌に、少年はさらに嗜虐的な肉悦を覚えた。

「ま、まだこのままでいて。感激だよ。ああ、お姉ちゃんのオマ○コ……」

見ているだけでは我慢できなくなった。貴樹は明里の股間ににじり寄り、内ももに指を食いこませる。

「きやつ。あん、いや、貴樹。ああああ」

突き出した舌を陰肉に突き立てる。明里の喉からひときわ凄艶な媚声が響いた。

とろみを帯びた粘り汁が舌に乗り、じわじわと味覚を刺激する。

(これが愛液の味。甘酸っぱくて、ちよつとしょっぱい。最高だ)

きつと、どんな味でも感激したに違いない。明里の媚肉から分泌された卑猥な汁を舐めていると思うだけで脳髓が沸騰し、射精しそうになる。

「お姉ちゃん。僕、たまらないよ」

「ああん、あんあん。だめ、そんなに舐めちゃ。いやん。ふはあ」

ピチャピチャ。れぢゅ。ちゅぱ。ピチャピチャ。れろん、れろれろっ。

淫蕩な汁音を響かせ、明里を不様な格好に貶めたまま、夢中になってクンニをした。舐めれば舐めるほど、膣から溢れ出す淫蜜は濃度を増して白く濁る。

(あつ、白くなって来た。つてことは、かなり感じ始めてるつてこと?)

AVや友人たちとの猥談で得た知識から判断し、いつそう昂った。

自分が明里にこんな下品な汁をお漏らしさせていると思うと、たまらなく幸せな気分になる。今や明里の恥肉は、よがり蜜と貴樹の唾液でドロドロだ。

「やん、貴樹。ひどい子。お姉ちゃん……ふはああ」

責めの矛先をワレメからクリトリスに転じる。肉莖のなかから牝豆をほじり出すよ

うに舐めると、明里はビクビクと痙攣した。

「感じるの、お姉ちゃん？ ああ……」

頭のなかがピンク色に茹だりだす。貴樹はさつきから疼きつばなしの肉棒を握り、しこしことしごきだした。

「あん、いやらしい。だめよ。何してるの？」

明里はクリトリスを嬲られる快感に悶えつつ、貴樹が自慰に耽りだしたことに気づいてうろたえた声を上げた。

「だ、だつて。もう僕……ああ、気持ちいい」

肉豆を舐めると、牝粒は大きさと硬さを増し、莢のなかから三分の二ほど姿を覗かせた。媚肉からは、白く濁った練乳のような粘り汁が溢れ出してくる。

「た、貴樹。そんなことしちゃだめ。あああ」

嫌悪ではなく、母性に満ちた声だった。明里は壁から背を離し、自ら抱きついてくる。二人はもつれあい、布団に転がった。

「どうしてそんなことするの。お姉ちゃんが大人にしてあげるって言ったのに」

仰向けになった貴樹に覆い被さり、甘い声で言った。

妖しく潤んだ瞳。麗しい朱唇は熱っぽい吐息を零す。乱れて片目を隠す、ウェーブ

のかかった髪もいつにも増してセクシーだ。

「お姉ちゃん……」

「もう我慢できない？ いいわ、じゃあ……大人になりなさい」

色っぽい微笑を浮かべて明里が囁いた。膝立ちになり、少年の股間に位置をずらす。唾液でヌルヌルになっていた怒張を再び手に取った。

今度は朱唇ではなく、ぷっくりと肥大した亀頭を媚肉にあてがう。

「うわっ。お、お姉ちゃん……」

「あふう。入れるわよ、ここに。あっあっ、ここに。ふわっ」

明里は自らペニスを動かし、ぬめる秘割れに擦りつけた。ヌチャヌチャといやらしい粘着音が響く。とろけた媚肉の感触がたまらなく心地いい。

（いよいよ僕、お姉ちゃんと一緒に。ああ、射精しちやいそう）

膣粘膜の園に亀頭を擦りつけられるだけで猛烈な射精感が湧いた。貴樹は慌てて肛門括約筋を窄め、必死に暴発を食い止める。

「入れるね、貴樹……」

明里のこんな妖艶な声を聞き、表情を目の当たりにするのは初めてだった。女性と  
いうのは、エッチの場ではこんなにも官能的なフェロモンを放つものなのか。

「あふん、貴樹……」

（あつ、入る。お姉ちゃんのなかに……）

明里が膣穴の入口に亀頭を密着させた。

「ああ」と艶めかしい嘆声を漏らして天を仰ぐ。おもむろに腰が落ちた。

にゆるん——窮屈でぬめつとした肉の狭間に、亀頭が、続いて棹が飛びこむ。

「あつ。うわつ。な、何これ。お姉ちゃん……」

「ああん、貴樹。あふうわああ……」

ズブツ……ズブズブズブツ……又チヨ……又ジュールプ、又チヨ。

首筋が引きつるのが分かった。貴樹は唇をわななかせ、生まれて初めて体験する膣挿入の快感に戦慄する。

（気持ちいい。何なの、これ……）

「あはあん。貴樹。どうしよう。ふはああ……」

明里は両膝を立てたまま、根元まで貴樹の怒張を腹の底に飲み込んだ。

とうとう貴樹は、性器と性器で愛しい女性と一つに繋がった。ペニスを包み込む膣

洞は驚くほど温かく、ヌルヌルして、時折棹と亀頭を不意打ち的に絞りこむ。

「お姉ちゃん。すごく気持ちいい」

「ああん……」

貴樹に覆い被さる格好で、明里が四つん這いになった。

重力に負け、豊満な乳房が釣り鐘みたいに伸張する。乳首を勃起させたまま、双子の乳肉がブラブラと揺れる眺めが猥褻だった。

「うふっ。大人になれたね、貴樹。おめでどう」

「ど、どうしよう。射精しちやいそう」

信じられない気持ちよさにうろたえ、貴樹は訴える口調で言った。

「まだ我慢しないとだめ。男の子でしょ？ さあ、動くからね」

「あっ。あああ」

「ふはあ……」

明里は清楚な美貌を紅潮させ、自堕落な前後動で腰を振り始めた。下品にぬかるむ牝肉の泥濘と、猛る牡勃起を自らの意志で擦りあわせる。

「ああ、明里姉ちゃん。嘘でしょ、気持ちよすぎる。あああ」

貴樹は戦慄し、懸命に肛門括約筋を窄めた。

気を抜けば、あつという間に果ててしまいそうな気持ちよさ。肥大したカリ首が、ヌチヨヌチヨした牝の子作り肉と強烈な窮屈さで擦過する。



(これが女の人の……明里姉ちゃんのおマ○コ。最高だ)

「あん。ふわっ。あはあぁ……」

「お姉ちゃん。あぁ……」

いまだかつて感じたことのない快感が、少年の背筋を駆け上がった。貴樹は必死に歯を食いしばり、想像をはるかに凌駕する膣壁の気持ちよさにおののく。

「あふん、んふうん。貴樹……あっあっ。ふはあぁ」

明里の大きな尻が、卑猥な動きで上へ下へと振り立てられた。

幼なじみの媚肉は、奥の奥までたっぷりと、ドロドロの愛液で潤んでいた。

なかに飲み込まれただけでも信じられない気持ちよさだったのに、卑俗な汁音とともに膣壁の凹凸に亀頭を擦られ、とろけるような恍惚感が湧く。

(嘘だろう。気持ちいい。セックスって……女の人のおマ○コって、こんなに気持ちいいものだったんだ)

とうとう大人になれた喜びなどどうでもよくなりそうな激感。世の大人たちは、子供の知らないところで夜ごとこんなに気持ちいいことをしていたのだ。

「気持ちいい。お姉ちゃんのおマ○コ、すごくいい……」

淫らな酩酊感に蝕まれ、夢うつつな心地になりながら貴樹は嘆声を零す。

「こ、こら、だめ。そんなこと言っちゃ。お姉ちゃん、恥ずかしい。あうっ、ふわっ、あっあっ……」

こんなにヌルヌルと膣を潤ませているのだ。

明里の女体にも、ふしだらな快感が駆け抜けているのは間違いなかった。

(こんなにおっぱいをブラブラ揺らして。それに、何てエロい腰使い)

ぬめる膣壁にカリ首を擦過される心地よさに視覚的な興奮が加わり、息苦しさが増す。貴樹は目の前で踊る乳房を両手で掴み、ねちっこい手つきで揉みしだいた。

「ふわっ。あん、貴樹……」

それだけでは飽き足らず、筒のようにした指で乳肉の先っぽをくびり出し、二つの乳勃起を交互に舐め、しゃぶり、舌で弾く。

「あふう、いやん。どうしよう。お、お姉ちゃん、感じちゃう……」

「ああ、僕もとろけちゃう。お姉ちゃんのオマ○コ最高だよ」

「ば、馬鹿。エッチなことばかり。あん、いけないわ。ふわあ……」

膣内を肉スリコギで掻き回される快樂に加え、乳房と乳首まで責め立てられ、明里はさらに艶っぽい声で喘いだ。この天国のような生殖の快感をもっと楽しんでいたのに、さっきまで童貞だった少年に、牝のぬめり肉は刺激が強すぎた。

「ああ、お姉ちゃん」

一気に強さを増した射精感に煽られ、明里の裸体を熱っぽく掻き抱く。可憐な人妻の女体はじんわりと汗ばんでいた。

「ふわっ。きやつ」

明里を抱いたまま身体を反転させ、今度は貴樹が上になった。自分から腰を振ってみる。ぎこちないながらも、蜜穴のなかをペニスが行ったり来たりした。

（自分で動くと、もっといっぱい気持ちいい。痺れちゃう）

「あん、貴樹。あつあつあつ。やん、すごい。そうよ。そうよ。ふわっ。あああ」

これが牡の本能なのか。自らの意志で明里を深々と貫き、愛しい幼なじみにエロチックな声を上げさせると、さらなる満足感を覚えた。密着した身体の間で、ひしゃげた乳房がクッションみたいに波打ち、貴樹の胸板に勃起乳首を食いこませる。

荒々しく明里の口を貪り、鼻息を荒らげて抽送の動きを加速させた。

「むぶうつ。ああん、貴樹。どうしよう。お姉ちゃんも感じちゃう。ふわっ。ああん、あん。ああああ」

「お姉ちゃん。気持ちいい。ねえ、なかに出していい？ もう出ちゃう……」

恍惚の悪寒が背筋を駆け上がった。皺々の肉稲荷のなかで精液が沸騰を始める。

先走り汁がブチュッと尿口から噴き出した。

「えっ。だ、だめよ、貴樹。なかはダメ。お姉ちゃん、今日危険日なの」  
貴樹のおねだりに、明里がうろたえた声を上げた。

だが貴樹はもう自分を抑えられない。最初で最後の、明里とのセックス。射精の瞬間にペニスを引き抜くなど、どうすればできるのか分からない。

「そ、そんなこと言われても。ごめんね。ごめんね。どうしよう。気持ちいい」  
じわじわと射精の瞬間が近づいてきた。入れても出しても、この世のものとは思えない快楽が爆ぜ、少年の脳髓をピンク色に茹であげる。

根元までペニスを突き刺すと、つきたての餅を思わせる柔らかな肉に亀頭が埋まった。子宮だろうか。明里の子宮は猛る鈴口をあやすように包み込んで、艶やかに絞りこむ。貴樹は甘酸っぱい恍惚感に耽溺し、狂ったように腰を振った。

「あっあっ。だめよ、貴樹。なかはだめ。お姉ちゃん、子供できちゃう。あっ、やだ、感じちゃう。ああん、気持ちいい……困る。どうして。ああん、気持ちいい！」

焦った明里は必死に貴樹の身体を押しつけようとする。だが狼狽する意志とは裏腹に、発情した女体は苛烈な昂揚感で呪縛されているらしい。

「あはああん。やだ、どうしよう。変な声出ちゃう。貴樹、だめ。恥ずかしい」



明里の喉から漏れる声は尻上がりに淫蕩な艶を増した。膣奥深く怒張を埋めるたびに気持ちよさそうな吠え声を上げ、セックスの恍惚に蝕まれた色っぽい顔を見せる。

「お姉ちゃん。すぐくエッチな声。嬉しい。お姉ちゃんのこんな声が聞けて。それに……ああ、すぐくきれい。ううっ、出るよ。ごめんね。我慢できない……」

息を詰め、カクカクと激しく腰を振った。

性器同士が摩擦しあう部分から卑猥な汁音が高らかに鳴り響く。

「どうしよう。気持ちいい。子供できちゃう。妊娠……妊娠……ああ、気持ちいい。奥まで刺さってるの。子宮気持ちいい。ああ。あああ！」

陰囊が過熱し、輸精管が痺れた。あまりの気持ちよさに、亀頭が大きく膨らむ。できたての精液が尿道をせり上がりだした。

「ああ、射精する！」

「ふわああ、貴樹い！ ああああああつ！ ああああああああああ！！」

どびゆる！ どびゆどびゆどびゆっ！ びゆる！ どびゆっ！！

獣じみた明里の咆哮が長い尾を引いて深夜の和室に轟いた。全裸の人妻は貴樹の身体にしがみつき、感電でもしたように女体を痙攣させる。

「あつ、ああ。最高だよ、お姉ちゃん……」

根元まで明里の蜜壺にペニスを埋めた貴樹は雄々しく陰茎を脈打たせ、吐精の悦びに酔い痴れた。六回、七回、八回——何度精を吐けば気が済むのか。肉棒は呆れるほど痙攣を繰り返し、そのたびにたっぷりの精液を飛び散らせる。

「あうっ。あつ、ああ、貴樹。入ってくる。いっぱい……いっぱい。あああ」

（お、お姉ちゃん？ お姉ちゃんも、一緒にイッたんだよな？）

顔を首筋に埋めたまま身を震わせているため、表情は確かめられなかった。だが間違いない明里もアクメの悦びに浸っている気がする。貴樹は幸せな達成感を覚えた。

「貴樹の馬鹿」

なじりながらも、どこかに「許す」響きを滲ませ、明里が言った。二人は互いに乱れた息を整え、恥悦を極め尽くした後のけだるさに身を浸した。

「お姉ちゃん。僕、最高に幸せだよ」

射精を終えた貴樹は、改めて汗ばんだ女体を力いっぱい抱擁する。

「ああ……たか、きつ」

ようやく明里は顔を見せてくれた。紅潮した美貌。妖しく潤んだ瞳。あまりに艶やかなその小顔に、貴樹はたまらない愛おしさを覚えた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**





# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!

**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!